

フリガナ	サカイ ヒデア
氏名	坂井 秀弥
学位	博士(学術)
学位記番号	新大博(学)第56号
学位授与の日付	平成19年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
博士論文名	古代地域社会の歴史考古学的研究 —越後・東国・東北—
論文審査委員	主査 教授 小林 昌二 副査 教授 荻 美津夫 副査 教授 矢田 俊文 副査 首都大学東京 教授 小野 昭

#### 博士論文の要旨

本論文は、中国モデルの日本律令国家における地方制度の国府や郡家が、歴史・文化、気候・風土を異にした多様な列島の、とくに東日本の各地域でいかに定着し、変容し、崩壊したのか、その経緯と要因を解明することを課題として、主に考古学の方法と成果による以下の4つの編から追求する。

第I編では、7～10世紀の土器と集落・官衙遺跡の分析から気候風土や地形環境と地域史において越後が日本海域や北陸道の各地域と密接に関連しており、また8世紀前半と9世紀後半に二つの大きな画期があり、各々が律令体制の確立と変容・崩壊の各期に当たることを提言している。

第II編では、対象を関東・甲信地方や東北地方に広げて地域間の比較を試み、第I編での遺跡の特徴と二つの画期が東日本にもほぼ認められるとする。7世紀半ば以降の東北地方は、太平洋側の陸奥と日本海側の出羽・越後北部とでは、城柵設置・須恵器生産で共通するが、城柵北進の度合いや集落の成立時期、分布密度に大きな差異があり、この相違を生み出す異なった地域が東西に接続してさらに大きな地域を形作っていたとする。

第III編は、遺跡で最も普遍的な土器から、越後が北陸地方だけでなく東海地方と生産技術上の交流を持っていたことや、古代の米の日常的な調理方法では現在とは異なる甑で蒸す方法によっていたこと、さらに日本列島で土器を大量消費する文化の時代が、古代で終焉したことなどを明示する。

第IV編では、発掘された水田遺構について、考古学および関連諸科学の総合的な調査・分析と、数少ない文献史料にみえる開発事業の現地比定を具体的に行い、古代の水田開発に伴う水田・用水・溜池などの施設が時代や地域をこえて広く継承され、地下遺構だけではなく現在に生きる水利施設として集落、地割・景観につながることを示し、これらが地域史を貫く貴重な歴史資料であることを強調している。

以上、考古学の方法と資料により、越後および東国・東北を主とした地域の重層構造と地域社会における律令体制の形成、定着、変容、崩壊の様相や要因を明らかにし、また地域社会をささえた開発については、考古資料や同時代の文献史料だけでなく後世の文書・絵図や地籍図、用水・溜池、地割などの資料から明らかにして、その現代に使われて「生きている資料」である意義を浮き彫りにしている。そして古代の地域社会の構造、特色を究明することが列島各地における確かな研究の一つになるとして、日本歴史の研究にとっても大きな意義があることを提言している。

#### 審査結果の要旨

本論文は、主として考古学の方法と資料により、古代律令期の越後を基点にして東国・東北を主とした地域における重層構造と、その各々の地域社会における律令体制の形成、定着、変容、崩壊の共通性や相違性による様相を比較して要因を明らかにし、古代の地域社会の構造、特色を究明したものである。本論文の意義は、およそ以下の四点にまとめることができる。

第一には、日本考古学の達成した高度、精緻な土器分析手法を十分に体得し発揮して、80年代前半に新潟県内頸城地域の遺跡を直接発掘調査し、今池遺跡国府説、栗原遺跡栗原郡家説、本長者原廃寺国分寺説等の諸説を提唱し、これらは今日でも有力な説をなしている。

第二には、80年代後半に自ら行った古代沼垂郡域の山三賀遺跡の精緻な発掘調査から須恵器の変化と対応した律令定着期の8世紀集落の一形態を抽出し、また頸城郡域の9世紀後半の須恵器変容期の一ノ口遺跡の調査からも今ひとつの集落のタイプを析出したことで、越後集落研究の嚆矢をなしている。さらに90年代に東国、東北の遺跡と資料で検証し、地域の重層構造を媒介にした考古学における東国古代集落研究の基礎を据える説の提唱にいたっている。

第三には、日本海域の山陰と北陸の分岐、北陸の最北にある越後が本州島のほぼ中央にあり、列島の古代国家においては辺境に位置する地域性を論じ、そうした越後の認識を基礎にして前掲の東北地域の重層構造として7世紀半ば以降の東北地方が、太平洋側の陸奥と日本海側の出羽・越後北部とでは城柵設置・須恵器生産で共通しながらも、城柵北進の度合いや集落の成立時期、分布密度では大きな差異があり、この相違を生み出す異なった東西の地域が接続してさらに大きな地域を形作っていたとする地域史の構造を提示していることにある。

第四に、地域社会をささえた開発の問題では、考古資料や同時代の文献史料だけではなく、地域に残された後世の文書・絵図や地籍図、用水・溜池、地割などの資料も十分活用した作業を行い、用水溝が現代に使用されている「生きている資料」としての意義を深めている。

以上、1980年代に自ら調査した越後の遺跡を基礎に、考古学における精緻な土器論・須恵器論を方法的な武器として越後を日本海域・北陸という広がりの中での地域論として位置づけ、1990年代には東国、東北地域ともつながる律令体制の地域構造としての重層構造論を提言した。さらに2000年代前半までに豊かな内水面を特色とする越後平野での地域支配の特色に分け入る一方、全国的な遺跡調査と保存の業務から多くの事例を選び取って加味し、その資料的な質量を加えてきた。研究対象がなお東日本に偏るが、古代的開発ではその舞台が西日本、畿内にあり、日本地域史の全体像への展望もある。その古代的開発の追求では、考古資料のみならず文書・絵図や地籍図、用水・溜池、地割などの資料が活用されており、考古学研究だけにとどまらない学識を示す学際的な研究として意義深いものがある。

本審査委員会は、本論文が質量ともに博士号の学位請求論文として十分な内容を持っていることを確認した。